

共同性の構造

渡 辺 寿 伝 治

まえがき

今回は本構造論最後の章となるものではないが、本紀要掲載論文に当てられたものとしては最終稿の形をとるものとなるのであり、本論の第四段階に当る章、題して「統一的規定性の、統一の働きの五段階」の所論である。この論題は第五号はしがきの中に挙げた目次第五章の全面的変更であつて、この変更に就いては既に第十一号まえがきで言及済みである。変更理由としては、紙数上制約を受ける紀要の特性に応じ、前所論の立証に制限を受けることを予想したので、所論を先に進め第四段階としての共同性の三契機間の連帶的機能（ \updownarrow の矢印の作用）を明かにすることによる方が却って紀要掲載の効用を確実にし得ると思ったからである。しかしこの本論のみで終るのも実はなお不十分なのであり、竜頭蛇尾の恐れなしとしない。実は此の後に第五段階としての「日本文献に観る構造分析とその統一的解釈による現代的意義の発揚」の所論が続くことになっていたのである。

目次

第五章 統一的規定性の、統一の働きの五段階

第一節 統一の働きの五段階

第二節 働きを示す矢印↑の考え方

一、↑の実態と五段階の現し方

二、↑の幾何学的図形把握、物・心による考察、易理の一例

三、一日における「有時」の考察

第三節 働きの五段階の実例的表現

一、組立部品とその組立に見る心

二、事物の成り具合、出来具合についての主観的表現と客観的表現

三、事物に即し働いている人の心に顕著な総括的気分

四、事物に即する総括的感動・讃称の表現

第四節 文献・諸論の部分事項或いは全体について観た五段階の現われ方の諸例

第六章 結言

第五章 統一的規定性の、統一の働きの五段階

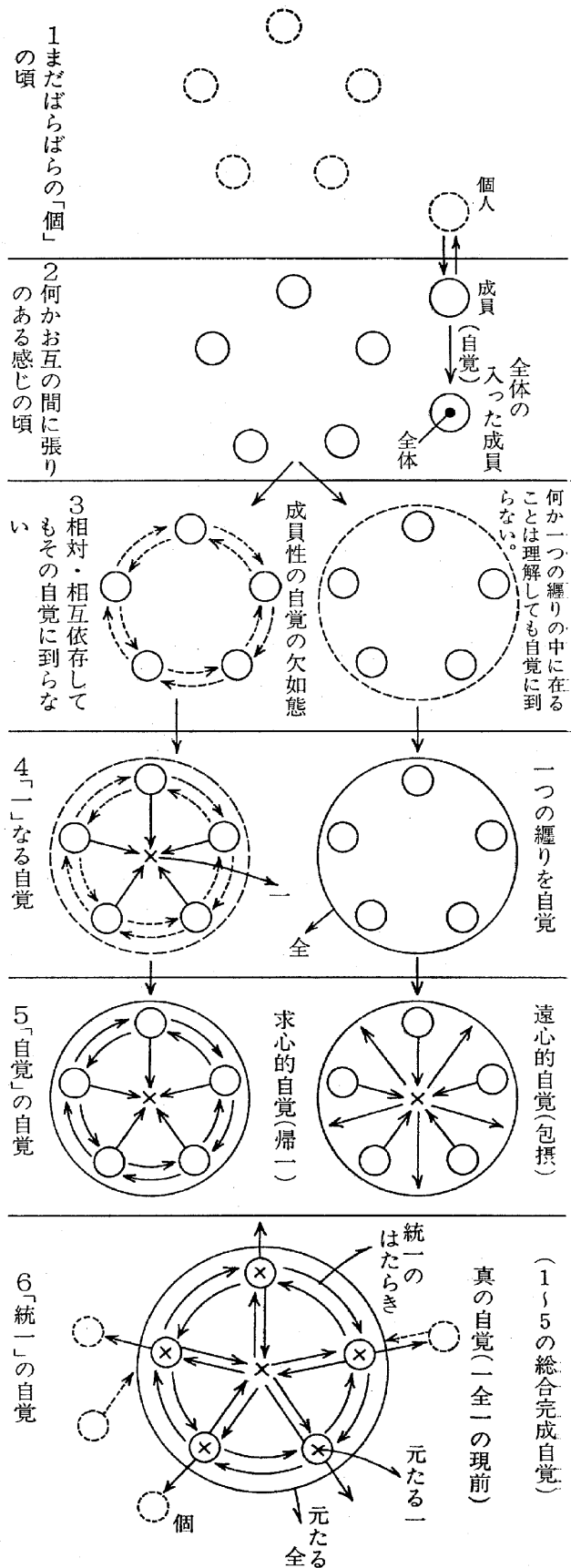
第一節 統一の働きの五段階

「統一」と言えば、統べて一にするとか一に統べるとかいう働きを意味する面と、そこに実現している「統」即ち全一・一・纏り、「二」即ち二ならざる全・本・本源を意味する面との両面を表わすと思われる。つまり実体とその活動との二義を不即不離に表わすと考える。常識でも考えることは、ここに一事物あれば、そこには何か一つの纏りがあってその中に在る細分化されている事物ばらばらが向うべき方向に向けられ、配置され、組織と秩序を与えられ、一全一としての機能を發揮しうる一体たらしめられ、その間に其処に纏りを持って存在する理由とも言うべき理法とか道が自ら顯現し、纏りあるところ理法あり、理法あるところ纏りとなつて事物は現われているということである。纏り即理、理即纏りである。理法によって纏められるというのではなく、纏まる所に自ら理法が体を顯すとも云う可きである。纏めるのは他動だが、纏まるのは自動である。ところで元もと纏まらぬものを纏めることは無理でもあり不可能であつて、そんなのを統とは言わない。統は理自体の自己表現作用であるからである。纏まる自動も理の実現・具現なくしては見事な一つの纏りになれない。統べる・統べられる両作用は常に一揃に働き、それを超えた奥なる働きによって可能ならしめられているのである。それが所謂天理であり、神理・真理で

あり、共同性であり、絶対的全体性若くはその働き・運動・力能である絶対的否定性なのである。然らば此の統一こそは共同性の自己開顯の作用と同義であつたと知る可きである。統一こそ共同性の働きに相応わしい作用であつて、押し付けがましい一方的全体化の他動的働きとは似ても似つかぬ作用なのである。現実的には、統べる・統べられる、纏める・纏められる、作用・反作用、求心・遠心、集約・離散、結合・分離等といった総じて対立拮抗に見られる二元的作用は、実は相待・待立・待合等の無元的一体作用が真相であり、帰一・還源・包摂・收納と相互連関・相互依存一体作用が何れも不即不離・不二不二として働く根源的構造の真相相であること、また相互依存や帰一・包摂の無元的作用の把握こそが人間存在の正しい理解を成り立たせる鍵であることを知るのである。統一の図式化は左の通り。(図一)

図における↑矢印で示される「はたらき」は、実は「思い遣り」とか、それに答える「感応の心」の籠つたもの即ちいのちのはたらきなのである。また誠実の心・信頼の心によるはたらきであり、打てば響き合う我入の心の現れともいべきもので、心を洗い去つた単なるはたらき一般ではない。また行為一般ではない。ところでその心がまたここで問われねばならぬ。西洋哲学的理解の心の主体は概ね法相宗で説く前五識・第六識・第七識止まりに当るものであり、特に優れた哲人は第八識辺りまで観ることはあつても第九識・第十識になるととも及びもつかぬことになっている。それも偏偏に知るや知らずや精神風土の相違に実はよるものであるが、その根本的相違の認識が後天

【一】「統一の真相」



的にも欠けると、その国々に特有の伝統的世界形成の構想とか生活理想若くは理念に関する共通理解が本当にはできないことになる。

物を与えるという一般行為も、布施の心でなされる場合は、行と漢字で表わし理解もするがそれは西洋的概念や範疇の「行為」の域内のもではなく、それが済度であり、救済であり、奉謝であり、菩薩の道であるということ、仏覚者にして可能な慈悲の心の離れない行為な

のである。イエス・キリストの与え給うは精神・心の糧であり、神衣であり、救いのいのちの水である。しからば「与える」という単なる行為は、人の魂を浄化して彼岸的・天国的世界の人びとにして始めて開かれる心の平安への道の導きであったのである。食物を与えるのは単に動物的食欲の具を補給してやるというのではない。

丁度これに類する事の一例に「自然」とか自然物とか謂われるもの

を一考するに、我が国の古事記には自然なる語は見当らない。山・川・草・木・火・海・金・雨・風等々の所謂自然物や自然に触れてはいるが、自然科学的、単なる客体的物件としての自然現象・自然物は無いのである。山一つにしても三輪山の如く、山自体が神体かみづみに坐す山もあれば、不二山の如く木花の佐久夜毘売の憑り給ひて祭神となりて坐す山もあり、ただ斎場に相應しい忌み所、即ち天津磐境であるものもある。お米は「みことよさし」に基く大御神様の「み恵み」であり、鏡も物一般ではない「みかがみ」と申せば、「御霊代」となり、礼拝してこちらの真心を捧げ奉る神としてそこになり出でますことになる。自然物・人工物何れにせよ総べてが神意かみい（天つ神諸もろもの命もちて）により現われ出て、神の心に通い合うお互即ち神神となっているのであって、我々は単に物とか心とかはたらきと申して自然科学的対象物一般のように倫理的意義を欠如・喪失させない用心が大切なのである。この用心が欠けてくるところより、仏教的に申して「無明」優勢（優先）の人類の世界になるのであって、人間と申しても兎もすればこの六道六趣の世界に浮沈する衆生一般の域を抜け出られないものとなるのである。

少し余談に流れた感があるが、これがまた大切な事理なのであって、要は、国語で表現している「統一」なるはたらきには、我が国ならではの感得がなかなかできないと思われる微妙な心こころの消息があるのであり、それは恰もかの統日本紀に見る「現つ神と八洲御宇しめす倭根子天皇」の治す御はたらき（これは食す・知らす・聞こす・見す等の五

感官的はたらきを以て示され阿羅耶識・第八識に一見縁遠くも感ぜられるもの）を明治憲法等で天皇の統治などと、天皇を議会制度の中に押し込めながらもなお我国独特の意味を出そう、西欧諸国の元首等の支配とは別物であることを強調したいというので、統治などというごちない、まるで支配と共に翻訳語を思わせる言葉を編み出した次第であるが、天皇（皇孫）の天津高御座の業は、その本質・心は天つ神の命もちて成し給う御業であり、西欧風の、人の上に人なきが如き人の恣意的わざではないのである。また西欧的君主の rule, govern のはたらきは支配とは訳せてもともと統治とは訳せない代物である。これが古来沙漠の人間にリードされる西欧風土の運命ともいふべきものなのである。西欧的押付一方の支配の気味の殆どないところに「治らす」御業が理解さる可きである。この治らすこそ、表現を異にするが心は一つの「統」なのである。統治は、統の強意の治、治の強意の統が相俟った表現なのである。統にせよ治にせよ、人意を愛でられ相い応ぜられる神意の籠もった言葉なのである。共同性のはたらきを表わすに統の字を用いたことに對する些かの心配ばりの余論である。

はたらきは働く主体の自己開頭であって、その現し方・現れ方には始まり有り、終り有り、その間に半・中が有る筈である。さてその始まりの前には準備用意が色々に既に始まっており、終りの後にも終りが効果の尾を引いて、五百年・千年経っても未だ終りが終つてない。つまり眼で見る世界では終つても、心で観る世界では弥いよそこに始まるという事では、終りは無いと諦めた方がよさそうである。始まり

の前の始めも肉眼では見えない心の思い、体の総力を用いたはたらきがあつて初めて事の始まりとなる。この始まる一事は、始まつた途端に常に一度いくつかに細分化されつつその一つ一つが始まり直して事は滑り出す。それが半ば頃ともなれば一つ一つが何時のまにか統合合一して全一にもたらされ、すべてこの細分化され動く中には全一化してゆく道・理法が入っており、それが順序とか秩序とか眼で見ても分る仕組の中で間違いなく終盤に到らせるのであるが、この理法感の昂りをもって終りを迎えるに到る一時がある。謂わば終る前の、今迄の締め括り、仕事なら完成品の見事な仕上げ、仕事の手順の反省、理論や技術の粹・精華ともいふべき製品の完成とそれに応じた歓喜等々、事を始めた経緯全般にわたる理法感が顯著である。かくて終りの段階に入り、ここで弥いよ新たな自信とか決意とかが生まれ、始めた事が道に適い、理法の実現であり、仕事に携つた人びとの誠心の奏で合ひであること、無事に斯く終りに到つたのも神の加護の恩であると感謝すること等終つて初めて味あわれうる境地となるのである。文章で言へば終章であり、結言である。ここにその事を始めた人の眞の姿が出現すると言えよう。そしてそれに接したり、関係したりした他の人びとは、その人の真心浄心に触れて自らを清める事になるのである。理法性を具えた仕事を完成し、またその仕事をする事が倫理に適う限りにおいて、人びとはその終りに接し感動を禁じえないのである。事を始めて良かった、色々困難苦労があつたが面白かった、皆と仲よくやれて楽しかった、道に適つた事をした、終つて弥いよその仕事や物は

世のため人のためになる「ぞ」ということになって大団円、芽出度し芽出度やなとなって目で見た上では一応終るのである。

事の始まりは事自体の中に既に有り、発しては必ず細分化し、それが分離離散するかと見えて実はいつしか合一・成一となり、事の精なる理法実現・仕上げとなり、仕事を始めた事の意義を実際的に明かしつつ、事の始まりの根拠に培うという五段階がはたらき、そのものに具っている現われ方の理である事理は動かないところと信ずるに到る。三種の契機は自体及び相互に必ずこの五段階を通してはたらき合うのであり、そこに共同性の全一的統の相が垣間見られることになっているのである。

これまでに言及したことは↑印一本のはたらきの分析解釈に止まるのであつて、具体的、實際的な、例えば親子関係自体の相互活動の五段という場合には、朝父母子三人が分れて家を出発し、出勤・登校・買物に赴く辺りはオヤコ自身に即した分離段階であることは明瞭であるが、オヤコ自体の第三段階としては、見掛け上は会社で父は楽しく働き、子は学校で楽しく勉強し、母は主婦として店で買物に楽しみ、お土産まで持つて帰るといふ、出先き出先きでの人間関係の第三段階が代替りになっていることも明かである。しかし此の出先きの、見掛け上の楽しみは、家に帰つてからの父・母・子という成員の心の糧といふか土台といふか、その実質を育むものであつて、出先で楽しくなくとも直に家で楽しいといふのでなく、他で楽しいことが、家での楽しさを幾倍も楽しくする事になるという意味で、この内なる第三段階を

他における第三段階に通ぜしめることにより、共同体自体の発展は、内・外を問わず、広く通じて第三段階として考えうるのである。第四段階もまた然り。しかし第四段階では寧ろ出先きから家のオヤコに復帰しつつある頃であり、出先でも第四段階あり、更には今やその第五段階を経て帰路に在るのであるから、オヤコ自体の第四段階に逐時入りつつあると観うるのである。一人の人のほたらきの完成過程に比べ、一人一人の完成過程を多数広く総合して観る上での完成過程、小にしては夫婦、大にしては国家と広く大観し、その五段階発展の経過を考える上でも、一本の↑矢印の指向性をもった働きは、その基本となるのであり、そこには共同性のいのちの自己開顯・自己還帰の能力が籠っているものである。

第二節 働きを示す↑矢印の考え方

一、↑の実態と五段階の現し方

前節においては、五段階が何の様に考えうるかという点に限って、あれこれ事例的に分析して来た。そこでは未だその結節結節の端的な把握の表現にまでは言及を差控えた。本節ではその結節毎の端的表現を矢張り事例を借りて、簡約な握り所となるような表現用語を導入してみたのである。

古事記の初めの方に伊邪那岐命伊邪那美の命二柱の御業始めの段があるが、

ここに天つ神諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、

二柱の神に、「この漂へる国を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。

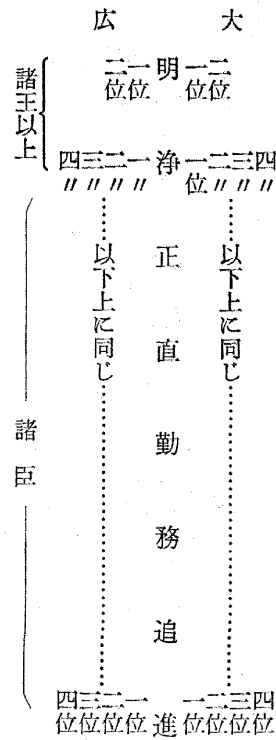
以上の様に語られる。ここに語られる国とは、それが青人草を含んだ国土そのものであれ、国の名にふさわしい国の精神を指したものであれ、今はそれには触れない。ただ修理固成の漢字を借りて表わそうとした心には少くとも四段階の区切りを感じ取っていて、その様に殊更な表現をしたと思われる。その訓み方であるが、前記のは修を「をさめる」、理を「つくる」と訓んでいる。今ここには出典・版本の論はしないで、色々な読み方があるということだけにする。もう二例としては、修はつくる、理はをさめるであり、また修理二字を合せてつくと訓んでいる。何れにしても、つくる・をさめる何れもそこを通過して初めて固成へ行くということであろう。自転車の修理、まことに解りよい。タイヤがパンク。ゴムの輪帯をはずし、釘の刺した孔にゴム糊を塗り、ゴム片を粘着させ、金輪にタイヤを嵌め込み、ポンプで空気を入れるなら、それで修理完了となる。元通りになって、また使用に供される訳である。理は定められた通りに直して元通りにするから丁度「治める」気分も濃厚である。「をさめる」おさめる」と訓むのが適している。修理作業が順序通りに着々と進んで行く気持は修理人も自転車自体も共に楽しいものであり、もとの姿に戻ることは心一つの完成であり、これは第三段階（人と物との一体感）に見立てうる。家を建築する、建てる、作るという事になれば、山から木を伐り出し、製材所で平板、角材、柱にして、材木屋を経て大工の手に渡る。ここで

大工は設計図に即合する寸法に色々な組立部品を作り、組立の準備をする。材料一般から部品用材に作り上げる段階が、この修に相当する。一方土地を均し基礎（コンクリート、足場作り、標示等）打ちする辺りまでが修である。次に設計図通りに手順よく大工の人数も按配して、準備された用材を組立てて行き、屋根も葺き、壁も塗り、やがて塗料も施し、水道も入り電気も入って後は諸検査や建具が入るだけとなる。固の一步手前、理の終りである。設計図通り出来上って、後は住む人が入る（成）だけとなれば固も終る。家を建てた棟梁の腕や名は讃えられ感謝され、皆々の御苦勞は今や恰も新築の家の光の如く明かである。これは固である。さて此んな立派に出来上った家に住む人が、これから何を始めようとするか、家の効用功德の現れどころという段階が成であろう。やや問題なのは、一番始めの修の段階であり、具体的にはここに準備の第一段階を含めて考えねば、五段階としては表現不足ということになる。子供を生む場合でも、修は寧ろ生まれてからの哺乳・保育の相当段階で、夫婦の誕生、受胎、出産準備等は第一段階であるが、夫婦は子を作ることを第一義として結ばれるのが古来の考え方、従って子作りと呼ばれて、修理の修より巾広く修の字を考えても許されはするが、稍稍広げ過ぎているのではないだろうか。修身に見る修は適格であろう。それが国ともなれば治・国となり、己の身を修めて規模を拡大し、国に己れを任ずれば、己自身が国の大ともなる次第、さすれば修国よりは治国が適切となる。もっとも国は修身の人が集って体を成すのであるから、国自体の修理固成からすれば修国・理

国・固国・成国があつてもよいけれど、治国といって修身の人が己の国に臨む段階を当てたのは所謂君子の徳の大成を指したのであり、人よく大をなし己一人と国とを融合させた第三段階にまことに相応しい表現である。修理固成に似た表現として、創造・化育・生成・鍛鍊を考えてみたが、この場合も四段階である。子供を産み（創造）、育て上げ（化育）、一人前の成人となつて、子として生まれた己れが、今度は自分の親の後にならつて自分が御子産みをする段取りとなる。ここまで来て、嘗ての親も子を産み育てた大仕事は一応完了したことになる。子は子で今や自分で、親たる自己の新たな道を進むことになる（生成）。ここに親子揃つて祖・子・孫一体の境地、三代一人を作り上げてゆく人生に入る。そこに人の世の道が幾代にも渡つて鍊え上げられ伝ひ存えてゆくのであり（鍛鍊）、そこに展開する麗わしい人倫の道こそ、人生の活力源・根本・光明となつて、人生は枯や衰に墮さない榮盛の弥榮の一筋道の場合と化してゆくのである。

斯くの如く考察して論者なりの結着を付けければ、修理固成は肇修はじめつくりをさめためなす理固成とし、創造化育生成鍛鍊は創造化育生成鍛鍊光明とでもしたらと考えている。

日本書紀の天武天皇の十四年春の詔により爵位六十階の制が設けられたが、それは

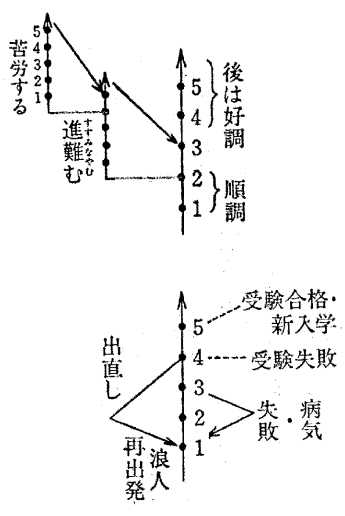


右の通りである。この表現は、書紀の全時代を通じてまことに見事な日本調の表現であり、国粹の模範の一つと考えている。二字組合わせば明・浄・直・勤・務・追進とするのが意味安定するが、これでは四段階となるので、浄き心を理法心として第四段階にあて、明かき心を光明心として第五段階にあて、分けて二段階とし、更に正・直・勤を併せて一段階として、第三段階に当て、務を第二段階に当てれば、都合よく五段階となる。四段階でも五段階でも詰るところ心の順当な進展をそこに観るのが大事と考えるので、牽強付会の何うでもよい言葉遊びをしているのではない。この様な表現を苦心して選び出し、道の実践に節度をつけ、大成を期して過ちなからんことを期した古人・先人の明に思を致したのである。最後の例などは、軍隊の階級に相對せしめると、まことに名は体を表わし得て妙である。即ちかつての陸軍に見るに、二等兵(進)、一等兵・上等兵(追)、兵長・伍長・軍曹(務)、曹長・特務曹長(勤)、准尉・少尉・中尉・大尉(直)、少・中・大佐(正)、将官(浄)、元帥・軍神(明)となるであろう。伍長勤務上等兵

は「務」に、古参軍曹は「勤」に、特務曹長が士官勤務につけば「直」に昇格させて考え得よう。とまれこの階級が名実共に具った名称であった訳である。しかしこれらは軍務遂行上の見地のもので、普く国民諸徳の完成の道の上では、名実を徳として観る上の尺度にはなるが、階級など徳にある訳ではない。倫理的なものの一端を、官吏の世界、軍隊などに限って見たまでのことである。

以上の如くして、今ここにこの↑矢印に諸節をつけて、書く時は單純には↑矢印ではあっても中味は ↑ 5 4 3 2 1、の内部構造をもつものと観てゆきたいのである。この様に考えることにより単に↑一本で示される諸はたらきに、色々な紛れや滞り等が現われて、諸節によっては紆余曲折し事左程簡単には進展しないことも含み示されるのである。(図二)

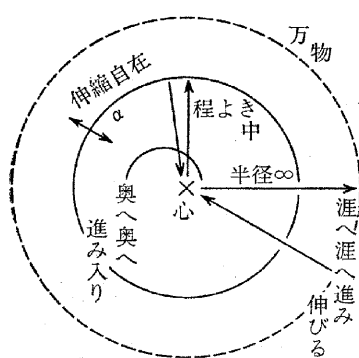
図二 紆余曲折の図



二、↑の幾何学的図形把握、物・心による考察、易理の一例

↑矢印の線分の部分は、図形図示上その長さに限定を受けるから、
 実際は長い道程でも短かく表現せざるを得ないことは、座標軸単位の
 取方と同じである。一般に(8)(8)で示せば直線であり、両方向に延
 び延びて果しない。

↑A BではABは線分を表わす。↑は矢



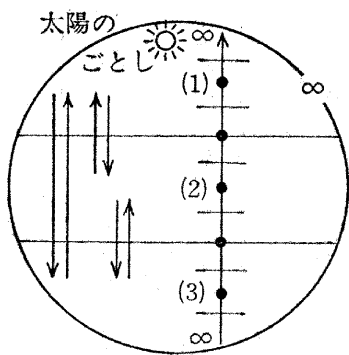
印の無い方から有る方に直線に主たる指向を与えた書き方である。矢
 印のない方が出てきた出発の第一段階の方向であり、今は行く方を主
 にして矢印を付けるから↑は到達目標の方向、つまり第五段階方向を
 示すものと考ええる。↑を一本とすれば、指向は一方的であり、↑とす
 れば相関の相互作用となる。道元禪師の正法眼蔵「現成公按」の巻の
 一節、「自己をはこびて方法を修証するを迷とす、万法すすみて自己
 を証するはさとりなり。」を頂くに、物から心への↓と心から物への
 ↑とを考え、簡単に図式化すれば、一応物⇕心と示しうるが、実
 体的には一心・万事万物が心の働き、物の用の表現であるから左図の
 如く↑は示され、一心は恰も円の中
 心に一座を占め、万物万事は恰も円
 周上に万座をもつて配置される様
 なる。×印心と点線：物との間が具
 体的相関の矢印↑であるが、その心
 を籠めて今は実線の円周を考え、こ
 の実線の円周aは幾らでも伸縮する
 と設定し、ここら辺りまでが程よき

相関の中の場合と考え表示するのである。

共同性を考える上でこの円の図式を用いると関係の図解が容易にな
 るのである。先の心と万法(万物・万事・万我)の相関も、物から心
 へ向うは悟であり、心から物へ向うは迷とする図式となる。ところで
 物から心へ向うとは、物が単にそのまま心の座に上りゆくのではなく、
 人の心が物(欲)を後にして、物から去り離れ離れて遂に人本来の正
 覚の心に入ること、心の自証過程を物の側から出発・出離し、所
 謂解脱・俗世物性(欲・無明)の否定の実現を現わしたまでの事であ
 る。教室で汚れた黒板を見て、「ああ、随分汚れているな」と其処で
 止まれば単なる客観で、これが迷。見た途端に我即黒板自身が「ああ、
 己は随分体が汚れたな。さあ一つ体を洗い清めよう」と今は我は黒板
 の手足そのものとなり変って一所懸命に黒板自身の身づくりをして
 綺麗になる。この心の世界に心と身(物)を処しうるのが、物が我を
 修証する悟とされたのである。これが真の主観たる悟である。

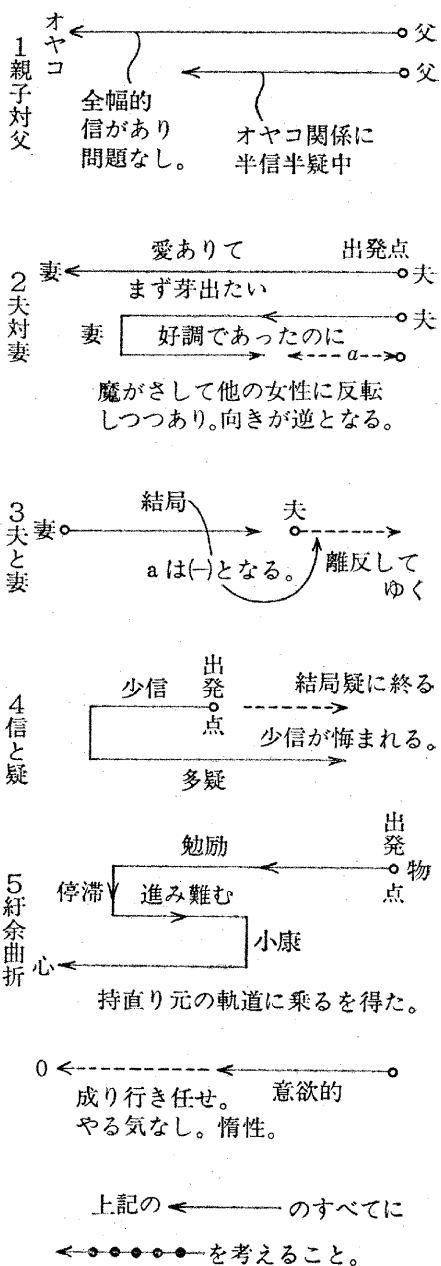
矢印の働きの進度を示すのに直線若くは線分の長さを以てすれば、
 更に面白くなる。紀要第五号頁廿五の図3・4・5を参考に一案を例
 示してみたい。共同体の全体性と成員、成員と成員の場合につき考え
 る。(図三)

次に物と心との関係に借りて、遠心と求心を考えてみる。分銅に紐
 を付けて振り廻わせば、明かに遠心力を感じるし、分銅の側に身を置
 けば反作用としての求心力を感じることになる。心が正心から物え向
 えば、本心を失って物欲の虜となる。古事記の神代巻の高天原・葦原



中国・根の国を図解すれば左の如く共同性の三契機と同図になる。これがまた巧まざる一致なのであり、物欲は(3)から(2)え行く間にほぼ整理されるが、(2)では修羅道の権勢・支配・権力欲がまだ残っている。(1)では欲としての物は関わりがなくなる。我々人間の人が(1)にあるとすれば、それは動物的人類的いのちの域を超えて、ひたすら道人即神として呼吸し(調息)、食は餓えない程度に、衣は風邪を引かず、住は雨雪や風に心身を侵されない程度に切詰め

から(1)え↑を上昇させ、これを五段階にして考える時には、三契機の世界(生活)を更に三段に分けて、つまるところ(3)から(1)えを九段階にして、前の五段階を考えるならば、十住心の例の如く、人心向上の路程を詳細に規定し、その統一性への理解を深め得ると思うのである。次に易理について少し触れてみる。今地天泰䷊に例を取る。なお爻辞間の相関である応・比・承・乗・抛等の取扱については紀要五号頁廿四の図二を参照されたい。原則として爻辞の表示は一番下位の第一爻から始まり上昇し第六爻に至るのである。易の爻辞は帰するところ其の一爻一爻がすべて君子修養積徳、修身治国平天下上の各爻に示される機に応じた訓戒事項であって、君子の挙動はその初動は常に謙讓・柔順・慎独・陰徳を積むのが好ましい所から考え、時に進み時に



図(三)「進度の図」

た生活をする。道人であるから常に神の恩頼に拝し合致し、祭祀・物忌を実修し、凡そ(3)におけるが如き物欲は微塵もない生活の世界である。記に依れば(1)から(2)えが天降り、(2)から(1)えが参上り、(1)から(3)、(2)から(3)は単に根の国へ行くのである。この(3)から(2)えは帰るのであり、行き帰りはまた(2)の常道でもある。今(3)

退き、出処進退を誤らないように努める。しかし時には機に乗じて大飛躍するので平素から其の時のための体力・気力・精神力を蓄積せねばならない。また元亨利貞が吉といっても、盛は衰え、満は欠ける。過ぎては及ばないから中正たるべし。控え目、程程、自重、退蔵等要点である。従って本項で言いうることは、各爻の爻辭に応じ、つとめて元亨利貞に適うべく、第五段階の精進を勤めてすることなのである（勤精進）。泰䷊の象は、「天地交わるは泰なり。后以て天地の道を財政し、天地の宜を輔相し、以て民を左^{たす}け右^{たす}く。」である。財政とは過ぎたるを制すること、輔相は不足を補ふことである。上卦を君に、下卦を臣に配し、上卦は下降し下卦は上昇し、ここに君臣上下の意志疎通して国家安泰の時、なお君たる者の心すべきことを財政輔相に要点をしほり民生を道あるものとするに眼目を置いたのである。初九即ち第一爻の主眼点は雑草は根ごと抜きさつて邪惡の残存するのを防止せよとする。同類の者に心ゆるさず禍根を残さぬ心がある。第二爻は賢臣たる可くば荒穢をも包含するの度量をもって果斷剛決を行い、疎遠な者をも遺失せず、だからと言って朋党比周の小人は近づけぬ様にするなら中道に合するとする。第三爻は天地に平^{たい}阪^{くわ}往^{かたむく}來^{ゆき}の循環の理有る如く、今泰は中を過ぎて否卦䷋に赴かんとする時、君子はこれに鑑み安逸に流れず艱に居る思いで貞正を守るならばなお安泰を保つことが出来るし、孚誠の通じないことに心悩まさずに能く誠信を尽すならば、敢て求めなかつた禄食をも得、それによりまた喪つたり腐敗したりすることは無いだろうとする。第四爻は富貴の身でも自己満足に陥

らず、身分は下でもその賢者に教を乞い、いつしか富貴を忘れるに至れば富貴でも心配ない。第五爻は位高き王の身をもてすら賢臣を敬愛する心を失わず、その教えに喜び順う謙虚さが元^{もと}吉^{きつ}となる。王がその妹を賢臣に帰^{かへ}せているのである。かくて昇りつめた第六爻では、案の定泰平の極、否䷋の現状の行詰り、危機に直面しようとしている。王たる者徒らに軍を起して力で解決しようとしても、折角築いた城廓も遂に崩壊して池土に還る失敗に終るから、ここは卑約謹慎すべきと戒めるのである。卑約とは身を低くし、諸事節して物入りの過ぐるを控えるのである。要は六爻間に身を処する思いで、君子の五段階精進を勤めることが、総じて「泰」の吉の面の維持に利すると考えればよい。否に転ずると、上卦は上昇し、下卦は下降して交わらない。この時は君子は徳を俟^{つづま}にし難^{がた}を辟^{はら}く。たとい人あつて君子を榮するに禄を以てしようとしても応じないで独を慎むのである。徳を俟にすると、韜晦し隠れるようにして生きることである。君子の徳が敬せられないのは、小人の道が長じ横行し君子は却つて邪魔になるだけであるからである。小人が大事な中の方にのさばり、君子は外に追いやられてゐる卦である。君子たる者の身の処し方は、本卦では殊の他難かしい。泰の第一卦からはじめて上りつめて転落すれば、泰の反、否となつた次第である。

今若干の事項を補いたい。求心と遠心のはたらきはまた集約と拡散の作用とも考えうる。或いは高尚と浅薄といった精神事実の上で上昇・下降、求心・遠心を考えることもできる。

また図形を平面上の円形とするより、四方八方への求心遠心を考慮して寧ろ立体の球面を設定した方がなお適切であるが、図式上は円に間に合わせることにしたのである。

三、一日における「有時」の考察

仏法渡来後七百年、八宗の仏教まことに盛大と謂われるが、当時の道元禪師は「必しも真の盛大を来したとは言えない」と正法眼藏隨聞記の中に言を遺しておられる。ただ高堂棧閣を造営し、仏像を造つたりすることが意義あるのではない。食事の作法一つ判然していない、僧食九拜の礼など当時にはあったのか無かったのかさえ不明であると歎かれるのである。かくて道元禪師は「赴粥飯法」を説かれることになる。飯を食うのではなく、道を行ずるとして食事に勤めるのである。食べ物とは所謂ものではなく、天地と人との心の連繋、橋掛、真実の道そのものなのである。お米は我が国では「御年」と申すが、これは人人の一生の真実の道農事の心と労とを一粒一粒に籠めたところよりの表現であろう。今世はいざ知らず、国の肇まった古し世の人人の悟道なのである。これから「典座教訓―禪心の生活―」篠原寿雄著、(一九六九三月刊、大蔵選書3、大蔵出版)によりその要点的概略を引用させて頂く。但し記した各段階区分は筆者の試案である。

庫院の雲板が三十六声鳴り、次いで僧堂の梆(ぼう)が三声、続いて庫院の雲板が一声鳴ると、僧堂内の総ての者は一斉に立ち、応量器(下鉢という)をとる。この時、文殊菩薩の侍者に当たっている者は文殊菩薩に靈膳を供える。淨人は外單の大太鼓を三会鳴らす(大搦という)。

住持は小鐘が適度の間隔に七つ鳴る間に入堂する。維那が高さ七米程の八角木製の鳴しもの(砵)をならす。(時には拍子木を用いる。)―これまで第一段階。

斯うして漸く応量器を展く(展鉢)段になるが、維那がカチンと槌を鳴らす前に、今日では通常展鉢の偈(五言八句)を唱える。―第二段階の一。「仏生迦毘羅 成道摩訶陀 說法波羅奈 入滅拘締羅 如来応量器 我今得數展 願共一切衆 三輪空寂」。その大意は、「釈尊の使われたのと同じ応量器で今食事を戴ける我が身の幸福を感謝し、世の一切の生けるものと共に食事の後にはもうこの一事に執着しないで其の場だけのものにしようとの意を念ずる」である。そこで弥いよ展鉢となる。―第二段階の二。これには細かな順序がある。また仕方、置き方、並べ方に念を入れる。給仕の順は雲水が先で住持が最後ののは、住持の慈悲心によるもので、これに答えるように雲水の修行弁道の奮励心も生まれる。食事の分配が全員に行き渡る(遍食)のを見て―第二段階の三。維那の合図で「五観の偈」を唱える。―第二段階の四。である。

一つには功の多少を計り彼の来処を量る。―偈の第一段階。

二つには己が徳行の全欠を付って供に応ず。―偈の第二段階。

三つには心を防ぎ過を離る事は貪等を宗とす。―偈の第三段階。

四つには正に良薬を事とするは形枯を療ぜんがためなり。―偈の第四段階。

五つには成道のための故に今此の食を受く。―偈の第五段階。

この偈を唱し終って、出生する。普通「先飯」という。――第二段階の五。指先で飯七粒ほどをとり、鉢を洗う時に使う刷柄（へら）の上に置く。こうして餓鬼に施すばかりでなく、有り難い食事を頂けない者の上に思を致す、乏しさを分つ尊い心の現れである。

次にこの生飯を取りながら、次の偈を唱える。――第三段階の一。
「汝等鬼神衆 我今施汝供 此食遍十方 一切鬼神共」

この偈が終ると一齐に応量器を両手に捧げて、――第三段階の二。「上分三宝 中分四恩 下及六道 皆同供養――途中であるが此れ迄が第三段階の三。――一口為断一切悪 二口為修一切善 三口為度諸衆生 皆共成仏道」。――第三段階の四。

この偈を唱え終って、低頭して御飯を弥いよ頂くのである。――第三段階の五。この偈の意味は、「上は仏法僧の三宝に分ち、中は国家・世間・父母・三宝の四恩に分ち、下は六道に及ぼし、皆同じく供養しよう。一口は一切悪を断ぜんため、二口は一切善を修めんがため、三口は諸もろの衆生を済度して、皆共に正しき智慧を得ますように。」となる。

さて食べ終って――第四段階の一。

静かに鉢を置いて浄人の来るのを待つ。御飯のお代りは再進（二杯）だけである。――第四段階の二。

この間すべて動静一如、ことりと物音一つ立てない。一同再建が終り箸を置くころ――第四段階の三。浄人はお湯を給仕する。熱湯は用いない。――第四段階の四。

皆はお湯を応量器に受け、刷を用いて洗い、拭い渴かして碗を重ね、袱紗に包む。鉢を洗った湯水は半分は自分で飲み、半分は餓鬼に施す。即ち浄人の持つて来る手のついた水桶（折水器）にあける。この時も偈を唱える。――第四段階の五。

我此洗鉢水 一偈の一段階
如天甘露味 〃〃二〃〃
施与鬼神衆 〃〃三〃〃
悉令得飽滿 〃〃四〃〃
庵摩休羅細婆訶 〃〃五〃〃

最後の真言は食事、折水に誦するもの。大なる腹をもつ者となるように、との意味の祈誓の言葉。一般に折水の時に誦する。（禪苑清規一卷八赴粥飯法）

かくて右の偈の第五の真言をもって、本粥飯法行事の第五段階を兼ねて終ると考える。筆者としては、諸偈の中で、五観文を最も重視し、普き食事作法の心構えとしてこれを念ずるものである。なお行鉢に用いる応量器は普通三つの黒漆塗りの碗で、大きい順に頭鉢・頭鑽・第二鑽と呼ぶ。匙や箸は匙筋袋と呼ばれる袋に入っている。

道元禪師はその正法眼蔵の「有時」の巻において、「有時高峯頂立、有時深深海底行。有時三頂八臂、有時丈六八尺。有時拄杖拂子、有時露柱灯笼。有時張三李四、有時大地虚空。」と古仏の言を冒頭に宣言されている。「時すでにこれ有なり、有みな時なり」、これがいわゆる有時を解く鍵であると考ええる。即ち万象万我万物は常に有るがま

まであって、それを人が心で捉えた時、その時がその万象万我万物の現成たる完成であり総である」という意味であると倫理的に考える。

禪師はさぞ筆者の苦しまぎれの見解を憐み給うことであらう。有時合格、有時病氣、有時不合格、これ等すべては大海の一波、唯我独尊のかけがえのなさもっているが万波は直に大海に帰して痕跡を残さない。あつという間に出了たとこ勝負は終つて、後には何もなかった如くである。願くば心を時にしては空の悠久無限とし、処としては広大なる海となり、区々たる俗世の時の神出鬼没、俗世の事物の小波の乱立に心迷ふことなく、莊嚴光明となり万世を濟度せんとする心域を示されたものと考ええる。この見地より僧堂における粥飯の行の一駒一駒の意義（こころ）を絶対視し、そこに入我我入すること、これが有時の心域と考えたのである。不二登山は、一合目でも五合目・頂上・砂走り・下山中でも皆登山そのものであり、どの一つが欠けても、否欠けることはもとと有り得ないが、登山の実を成さぬのであり、一合目は未だ序の口、登山の駆け出し等といって甘く観ては登山の清浄心は穢れ傷つく。それには、不二山を御神体の如く仰ぎ頂き、そのみにちに入れて頂くという信仰的誠実さがまず肝要である。一円欠けても百円にはならぬ。完璧性は一円でも九十五円でも皆同じ、そこには何等の差違もない。今世は自動車でつつ走り（登るのではない。一歩み一歩み六魂清浄を念じつつ慎重畏み歩を進めるのが不二の歩行法である。）いきなり五合目まで行ってしまうこともできるが、だからといって五合目を出発点の一合とする訳には参らぬのである。ましてや

昔は吉田口なら浅間神社から始まり馬返しの序の口を経て漸く一合に到るので、この間の調息こそ神氣を含むもの、いつしか神人合一に入り、神自体のはたらき神樂びとなる。この様に考える時、僧堂粥飯法の一駒一駒は、一駒自体が五段階の五段階を内に有する程、綿密念入りの修行道であることを知るべきであらう。

一日の貴重な生活をその日暮しなどと甘く観ないで、道体そのものたるいのちの一日の実修、一年の実修を考えてはどうか。一日の朝・昼・夜の実修の一つ一つは皆どこでもいつでもかけがえのない有事の意義をもつのである。朝起き一つにしても、「起きた方が利益であらうか、はたまた損か、起きる可きか、起きてならぬものなのか」と推理判断して起きてはいない筈なのが、自然の起きであらう。その意義が判然しないうちには己は起きないぞ等といって何時までも寝ている訳には行かない。分けも未だ分らぬ子供に「起きなさい」と言われると嫌いや起き上がって終う。これでは朝起きではない。朝起き程、待っていました・よくぞござんなれ、絶好のチャンスのだ来だというので、元氣も一杯、そらっ・がぱつと起上る。静かに緩やかに起きてもよい、愚図ぐずしないことが肝要。その自動力の素晴らしさ、これこそ神業なのである。このように「いざ参れ、参ろう」の「いざ」こそいのちの本命の自覚が朝起きそのものである。夜勤から帰って、朝これから眠るというのは夜勤などという生活の分野があることすらが不自然であり、どこか狂っている証拠と覚悟しうればまず合格・及第である。狂いの生活を余儀なくされる衆生の浮世を何とかせねば

なるまいというものである。

「お早う」「やーお早う」と元気の心を掛け合って、お互に打解け合
い一心の同体として一日を開始するという、御神体たる一日様がはた
らき始め給うという、何れにしても神・人共に雄大な美しい意気込が
朝起きる気分でなければならぬ。那岐・那美二神のみのまぐわいに
よる国土創成の意気込こそ、人の世の朝起きる心でなければならぬと
信ずる。朝起きばかりでなく洗顔水浴即ち禊祓は、その中にあの那岐
の神の何段もの禊ぎより、天照大御神・月読命・建速須佐之男命の三
貴子出生の大事があったという信仰が入っているであることを思う
べきであろう。我国ばかりでなく、朝起き、洗顔は何処の国にでもあ
ると思いきや、朝は兎に角起きるが、次に洗顔の前にコーヒーなど飲
むのが習いのところもある。大海の水が高天原に参上り、その天から
降って根の国に浸み込んだものを、差し当り必要だけを金盥たらいⅡ洗面
器に汲んで使うので、その心は大宇宙の水で顔を洗っている雄大な出
来事なのである。水浴でも太平洋全体の水を浴びる心が大切であるこ
とを知らせて呉れるのが、朝の水浴であり、昼間のプールや海・川で
の水泳一般ではない。長々と述べたが、一事が万事すべて一つとして
かけがえのない有あ時の心のあらわれでないものはないことを明かにし
たからである。

第三節 働きの五段階の実例的表現

一、組立部品とその組立に見る心

一 部品を一揃い集め調える。一揃いの部品となるまでの、関わった
一切の人々の手や心や物・事が集約・結集して其処に有りと見えねば
心なき輩となろう。部品は部品として、既に原料・材料の域を経て来
ているが、まだ本体とは似ても似つかぬ、及びもつかぬ遠い所にある
代物で、これが本体になろうなどとは一寸想像もつかない。

二 部品と部品が組合わされて段々大きくなってゆくが、まだまだ
大きな部品の段階。作る人の心もはずみ、腕も益益冴えてくる。

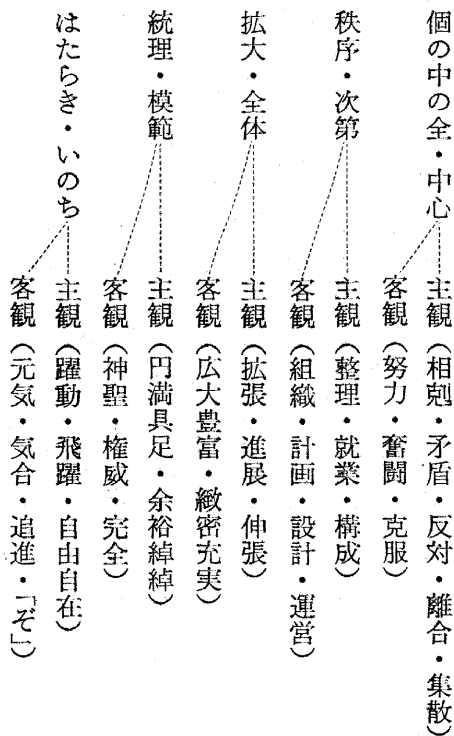
三 一応設計図通り組立て上がる。この段階に入ると作る人の心は
実に楽しいし、また一番熱中している。気持のよい程、組立作業も運
ぶ。二段階では時々思うように渉らぬこともあった。付属品などもつ
ける。

四 理法のこもった部品が理法通りに事が運んで、今や完成された
理法体（規格に適った規範の標準品・最新技術の粹の集った製品）が
現前する。テストにも合格し、今や全く完成品となる。

五 梱包され、包装されて製作所・工場から外へ出てゆく。家庭に、
職場に、機能を遺憾なく発揮する。かくて「はたらき」でなかった物
一般は、組立完成されると単に物一般ではなく人の用、人のはたらき、
人の心と化してゆく。物は人の心のあらわれの意味を有って始めて物
となりうる。人の道実現のはたらき、その心が籠って始めて物となる。

この様に五段階を考へることも出来よう。部分たる部品も設計に基き作られたもの、部品には設計された全体が見えてゐる。設計図として生きている全体が静かに今部品に現われている。成員に感ぜられる全体感が、一揃の部品全体に見えてゐる。その部品が組立てられつつ、部品Ⅱ成員の実(成員性・特色・名と為)を發揮しつつ、遂に己を捨てて全体即部品から出て来た完成品即組立設計品の一全体となつて現われる。そこには理法があり、したがってまた理法の現われでもある。そして赴く所へ出て行く。使命・目的を達成する。即ち生を全うしてゆくのである。個々の上に宿る全、成員、具体的全体、理法、全体のはたらきⅡ理法の實現Ⅱ道の実踐の五段階の一例である。

二、事物の成り具合、出来具合についての主観的表現と客観的表現



以上の様に、(一) 個の中の全・中心、(二) 秩序・次第、(三) 拡大・全体、(四) 統理・模範、(五) はたらき・いのちの五段階を觀ることも出来る。

三、事物に即し働いている人の心に顯著な総括的氣分

(一) 心の個々の矛盾は清え失せて、今はただ、万感歸一の平安・静寂の安らかな心
 (二) (一)の心の拠つて來たる所の個々の心を新たに改めて取り入だし、如何にも一つ一つが有難く懷しまれて今更のように面白い数々の心
 (三) 数々の心は次第に重なり合はさり、融け合い、通い合つて一つの大きな心となれば何ともいい様のない楽しい心が現われる。一つのちの心である。

(四) この様に(一)の心は(二)の心となり、(二)の心が(三)の心となつてゆくところ、そこに道あり理法あればであり、否々一↓二↓三と進まなければ道も理法も現われようがないとする四のころがある。かくて一・二・三・四が一揃になるところに自らの、また止むに已まれぬ不退転の五の心に結びがくる。これが元氣・意氣込・「ぞ」の心である。
 (一) 平かな安らかな心 (二) 有難き懷しき心 (三) たのしき一つ生命の心 (四) 明けき道の心 (五) 元氣・意氣込の心と表わせよう。この様に心のあらわれように五段階があるから、これが揃はぬ心の人は、何処かに病が潜み、氣の狂い、性のひねくれがあることになる。

四、事物に即する総括的感動・讃称の表現

まず前項三で示した心は、なお一層事物に即して表わせば、(一) 神・上

みの心、(二) ひとの心、(三) く^{里郷國}にの心、(四) 道の心、(五) いのち・その心と表わせよう。

生活に即して表わせば、(一) 公明、(二) 正大、(三) 融和、(四) 道義、(五) 熱心となろう。

「誠」について分析すれば、(一) 至誠、(二) 忠誠、(三) 大誠、(四) 精誠、(五) 赤誠と表わせよう。

最後に感動・讃称について分ければ、

天晴れ あな面白 あな手伸し あな明け おけ (「古語拾遺」)
右の五つの称^たえなる心がある。この五心についての詳細は寛克彦博士進講の書「神ながらの道」(皇后宮職御蔵版 大正十五年一月)に精魂傾けての明解がある。我が国の学問の粹、究極の道は、この「天晴れ：おけ」の心に発し且つ集まると言つて過言ではないと信ずるが、その道の学問や教養のなかつたり欠けている方々からは、やれ 神懸りだ、独断だ、超国家主義だ と擲^なげられた、現代では難解になつてしまつてゐる表現ではあるが、これ程簡にして要を得たところの心の表現は他の我国文献にも見ないし、諸外国のものなどには見るべくもないものである。

天照大御神の、天の石屋戸出でまじに際し、八百万神によつて唱和^{ひたわらい}哄笑^{ほうしょう}された故事来歴をもつ、この五つの祝^{ことほ}ぎ称^なえの言葉こそ、仏教等の真言に相当する、否それ以上の粹となる、神道の真言であると思ふ。共同性のいのちの光り出る妙音である。色々に五段階を考へてきたが、それぞれの段階の要約表記として、一、天晴れ 二、あな面白

三、あな面白 四、あな明け 五、おけ を用いることも、単に二・三・四・五と区分するよりも、心が籠^{こも}っていると考へられないだろうか。

第四節 文献・諸論の部分事項或いは全体について観た五段階の現われ方の諸例

許された紙数も尽きようとしていたのでまたまた竜頭蛇尾に終ろうとしている。説明が不十分の点はお許し頂き度い。一例でも多くお示ししたい思ひからである。あとは実際に文献に當つてよく検証して頂ければ、この分類も大きくは誤つていないと信ずる。

一、六無為(紀要第十一号頁二十五)

抃滅無為は 天晴れ、非抃滅無為は あな面白、虚空無為は あな手伸し、不動無為は あな明け、相受滅無為・真如無為は おけ である、或いは最後の真如無為は上記五無為の総括全体として絶対的全体性の心として共同性に相対せしめることも許されよう。即ち「天晴れ：おけ」の一全一心。

二、曹洞の五位(紀要第十一号頁二十六)

正の中の偏 × 父の一人、女の一人、子の一人欠けてもオヤコにならない。(第二)

偏の中の正 × 父の一人、女の一人、子の一人欠けてもオヤコにならない。(第二)
母の一人、子の一人が、父・母・子になつてかけがえがない。(第二)

正中より来る^{あらわれ}



・印は成員、矛盾反対する全と個を成員・印で融和し一体に成立させる。父の中にオヤコあり又一人あり、母の中にオヤコあり又一人あり、子の中にオヤコあり又一人ありである。(第三)

兼中に至る



父と言え、まずそれには母・子

があるからだ。その母とよび、子とよぶのは正しくオヤコであるからだ。父といえ、それ故に父即オヤコであり母と子と共に親子であるからだ。父といえ、それ故に父即オヤコであり母と子と共に親子である。オヤコは何も父一人に限らない。母も子も何れもオヤコである。オヤコは父・母・子の三人に分れなければ無いも同然である。全部揃ってオヤコも一人も成員も全体もある。

兼中に到る



一は中程・半を示す。(一)(二)(三)(四)皆

そろって一にあるから乱れない。オヤを心とし子を物とすれば、オヤから子にゆき、子からオヤに帰る。本から出て本来の本に帰る。ここに弥い^いが現われる。オヤはいよいよ子を生んでオヤたり得べく、その子はいよいよオヤたらんと生長・成長する。オヤは子を生んでも子がいままで子のままで育たずオヤにならないと、大きなオヤにならない。しからはオヤ自身が成長せず発育せず、やがてその生命は枯渇する。枯渇させるために子を生む、これは可笑しい。子など生まないで夫婦のままでいた方がよい。ところが子を生み作るために夫婦がまずあり、そこから人間が発するのであるから、どうしてもオヤは^お大オヤ即ち祖父母にならねばならぬ。これが祖・子・孫一体、弥栄の理でも

ある。

三、宝鏡三昧(紀要十一号頁二十九)

本論は絶対的全体性Ⅱ共同性のはたらき↑を全般的に語っているの
で、いわば人間存在と人類的有り方とを 人間 × ↓ 人類
で説いたと考える。

四、参同契(紀要第十一号頁三十三)

(一) 仏心は共同性・絶対的全体性にみだてる。
(二) 仏心は靈妙な真理と差別の現実界・現象界に分けられる。
(三) 仏心の一全世界は円融面(平等作用面)と独立面(差別作用面)
Ⅱ物に分けられるが共に一つの全一真理の二面であることを示す。同
じく、六境の一つ色境には十二顯色即ち色^{いろ}と八形即ち形^{かたち}がある。また
地・水・火・風の四大は平等にして助け合う。そして心の空を実現す
る。また六根六境は和合する。

(四) 靈源と支派、回互と不回互、本たる平等面と末たる差別面は究
極の仏心(真理)から出る。

(五) 万物は他を以て替え得ない。万物個々のかけがえのなさは全一
を却って面目躍如たらしめる。仏法を学ぶものは(絶対的全体性Ⅱ共
同性を知らんとする者は)根本の宗旨^{おきなむね}(よって一切を成り立
たしめている根本原理・構造)を会得せよ。それには信を先人の言・
教に置くことである。

五、臨済の四料揀(紀要第十一号頁三十四)

有時奪人不奪境 第一段階は心の美麗

有時奪境不奪人

第二段階は国民の実態

有時人境俱奪

第三段階は時勢の全

有時人境俱不奪

第五段階は教なり。

人・境・俱・奪・不奪

言外第四段階。

六、通戒偈（紀要第十一号頁三十五）

通戒偈誦誦の心 第一段階とすると安定する。

諸惡莫作

第二〃である

衆善奉行

第三〃である

自淨其意

第四〃である

是諸仏教

第五〃の諦觀である

(一)は平常の仏心であり、(四)は(一)(二)(三)の準則であり、(五)は善の回向の仏道・無上道全力前進の今なるぞである。

七、十牛図（紀要第九号頁十一）

(一)尋牛 發菩提心の位、第一段階。(二)見跡・(三)見牛・(四)得牛・(五)牧牛・(六)騎牛帰家 修行の位、第二段階。(七)忘牛存人・(八)人牛俱忘 前者は小乗我空の成菩提、後者は大乘我法俱空の成菩提 共に第三段階。(九)返本還源 入涅槃の位、是れは大・小乗に通ずる、第四段階。(十)入鄺垂手 方便究竟の位、第五段階。

八、十住心（紀要第九号頁十四）

第一段階 異生羶羊心、愚童持齋心。
第二段階 嬰童無畏心、唯蘊無我心、拔業因種心。
第三段階 他緣大乘心、覺心不生心。

第四段階 一道無為心、極無自性心。

第五段階 秘密莊嚴心。

九、古事記（岩波文庫、倉野憲司校注本）

第一段階 序文、別天つ神五柱、神世七代、那岐那美二神の項三貴子の出生、分治まで

第二段階 須佐之男命の涕泣、須神の昇天。

第三段階 天の安の河の誓約より天の石屋戸、五穀の起源、須神の大蛇退治まで。及び大國主神全章、葦原中國平定全章。

第四段階 邇邇芸命全章、火遠理命全章。

第五段階 中つ巻・下つ巻両全巻。

十、易経（岩波文庫本）

六十四卦早見表に示した各段階は主として小成の卦本位のもので、これを直ちに大成の卦に用いることは出来ない。(一)の乾より(六十四)の坤に到る順は誠に絶妙で、次のような大成の卦の段階を見る。

((一))((五)) 第一段階 ((六))((八)) 第二段階
((九))((三)) 第三段階 ((古))((罕)) 第四段階
((十一))((六十四)) 第五段階 (天降りより人皇全代)

第五段階	第四段階	第三段階	第二段階	第一段階	上卦 / 下卦	
					天 乾	地 坤
地 坤 8	山 艮 7	雷 震 4	火 離 3	沢 兌 2	天 乾 1	地 坤 1
泰 8	大畜 7	大壮 4	大有 3	夬 2	乾 1	坤 1
臨 16	損 15	歸妹 12	睽 11	兌 10	履 9	兌 10
明夷 24	賁 23	豐 20	離 19	革 13	同人 17	火 離 13
復 32	頤 31	震 23	噬嗑 27	隨 26	无妄 25	雷 震 16
升 40	蠱 39	恒 36	鼎 35	大過 34	姤 33	風 巽 35
師 48	蒙 47	解 44	未濟 43	困 42	訟 41	水 坎 40
謙 56	艮 55	小過 52	旅 51	咸 50	遯 49	山 艮 48
坤 64	剝 63	予 60	晋 59	萃 58	否 57	地 坤 64

十一、般若波羅蜜多心經（岩波文庫本）

玄奘訳による。

第一段階 般若波羅蜜多心經 觀自在菩薩。行深——度一切若厄。

第二段階 舍利子。色不異空。——無智亦無得。以無所得故。

第三段階 菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。——得阿耨多羅三藐三菩提。

第四段階 故知般若波羅蜜多。是大神咒。——即說咒曰。

第五段階 揭帝 揭帝——菩提僧莎訶。般若波羅蜜多心經

第六章 結 言

和辻倫理学によっていみじくも解明された連帯的人倫組織の中でも重要な位置をしめた地縁共同体たる農村の、大東亜戦争後の被占領以来の意外な衰退変容に替って、明治初年来訳語として用いられた「社会」の語が真の社会性の欠如したものであったにも拘らず、むしろそれを好便として所謂現代西欧風市民社会の形で育って登場した。その憂うべき志操の欠如と貧困を指摘することより始めて、共同体の諸事項を再検討しつつ四稿を重ねて、共同体を共同体たらしめる根本原理たる共同性の「はたらき」を構造的理解上の三契機間の流通交渉作用として分析を試みた。その論証に当っては、思想より寧ろ立論の志操を重視し、主として東洋関係、特に印度仏典にその多くを仰いだ。しかし、本論稿における如き、正面より倫理学を人間存在の学とする根拠よりそれらを取上げたものではなく、いわば前人未踏の挙であって

その正否は諸賢の御判断を仰ぐに委ねられたものである。このあと第五稿が続くところであったが投稿上の制約によりこれを断念せざるを得なくなった。第五稿にこそ、志操混乱せる現下我が国を救う教学の端初たらむを期していたのである。

諸賢の相変らざる御鞭撻を仰ぐのみである。

（本学教授・倫理学）